

在宅医療市民講演会とシンポジウムを開催しました

◎平成27年10月17日(日) 13:00~15:30
大安公民館 ホールにて在宅医療市民講演会を開催。いなべ市・東員町・他の地域から参加していただきました。一般の方、医療や介護、福祉職、行政関係を含わせて102名の参加がありました。

テーマ「人生の最期まで、住み慣れた地域で、自分らしい暮らしを」

第1部

「生活の中での医療と介護 ときどき医療ときどき介護」

愛媛大学医学部附属病院 総合診療サポートセンター
センター長 櫃本 真幸先生

日本の高齢化は、世界のトップランナーであり、2100年の人口は1億2千万人から4000万人まで減少し、2030年には約半数が65歳以上になると推計されている。そこで、地域包括ケア時代として重要なことは、その人らしい生き方、死に方であり、今回そのことがしっかりと明記をされた。

地域包括ケアシステムでは、その人らしい生き方、死に方を実現していくためのシステムであり、自分自身が何をしてほしいか、どう生きたいか、どう死にたいかがはっきりしない限り地域包括ケアは成り立たない。

65歳以上になれば「ときどき医療」、75歳以上になれば「ときどき介護」は当たり前であるが、85歳以上になっても元気でいられるよう、出来る限り医療、介護を受ける時期を遅らせるような、元気高齢者育成支援が重要である。年をとっても自分らしく生き、その地域のために活躍できる場を作っていくことも必要である。

また、医療や介護が必要になったときに、かかりつけネットワークがあれば、自分の生き方、死に方を支援してくれる。大事なことはかかりつけネットワークを持ち、その中で自らが健康を管理し、自分に出来ることを社会に提供し、感謝されながらのサイクルの中で自分らしい生き方をしていく。それが、地域包括ケア時代の住民のこころ構えである。

第2部

「在宅医療・介護を支えるそれぞれの立場から」

①医療の立場から:桑原浩氏(いなべ医師会長)

在宅医療は、市民の方には大きな問題で、「夜中、休日いつでも往診にきてもらえますか？希望すればすぐに入院させてもらえますか？」と聞かれます。在宅医療は、患者さんとかかりつけ医との1対1ですというものでなく、担当医、訪問看護ステーション、ケアマネジャー、介護サービス、行政が繋がり、家族とともにその人が穏やかに過ごせる時間を持つということです。

②ケアマネジャーの立場から:福本美津子氏(三重県介護支援専門員協会桑員支部長)

介護保険の基本理念に自立支援があり、そこには自分らしい生き方、自己決定権があります。介護支援専門員は、自立支援と生活の質を考え、その人が望む生き方を支援していきたいと思っています。

③訪問看護の立場から:守山浩子氏(いなべ総合病院 訪問看護ステーション長)

訪問看護師は、利用される方のライフスタイルに着眼し、生活を高めることを考え、利用者さんが何をしたいと思っているのか、どんな生活を継続したいと思っているのかという本人の意志を大切に看護しています。

④介護の立場から:山本竜司氏(なでしこの家 かりんの家 総括)

介護の基本理念は、病気や障害となり支援が必要となった方への、食事、排泄、入浴等のお世話をする事。しかしそのことよりも残された時間を失意や遠慮の中で生きていくのではなく、利用者の方が主人公となって少しでも生活を豊かにできる手助けをすることが、介護職の使命と思っています。

⑤介護者の立場から:伊藤由美子氏

「死ぬときは畳の上で死にたい」と言っていたお父様を、今年6月に看取られました。まだまだお辛い中で、今回在宅ケアを選択し、最期まで看取りが出来たこと、素晴らしい在宅ケアがあることをもっと多くの人に知ってほしいとお話をさせていただきました。(事務局)